

「研究動向」近年のテレビ研究の潮流と展望 2003～2015

木下浩一

一 はじめに

本稿では、近年の日本国内におけるテレビ研究をレビューする。まずはレビュー対象について説明を加える。

レビューの主な対象は、基本的に「学術専門書として刊行された書籍」とし、その期間は「二〇〇三年前後から本稿執筆の二〇一五年末までの十年余」とする。書籍を対象とした理由は、テレビ研究者が広くアクセスしやすく、また書籍化されていること自体が一定度の評価であると考ええるからである。テレビ研究は各領域で幅広くなされており、日本マス・コミュニケーション学芸編『マス・コミュニケーション研究』(学文社)

をはじめとした学会誌などにも多くの論文が存在する。しかしそれらの論文も、評価を得たものは後に書籍化されることになるだろう(ただし、学会誌や紀要を対象外としたことで、最新の研究は除外されることになる)。

次に、レビューの期間について述べる。NHKのテレビ放送開始から、すでに六〇年以上が経過している⁽¹⁾。放送と平行して多くのテレビ研究が行われており、「テレビ研究史」を振り返るならば相応の期間が必要となる。しかし本稿においては、今後テレビ研究を行う場合などを想定し、前述の期間とした。

期間については、二〇〇〇年代における「地上波テレビ放送のデジタル化」も理由のひとつである⁽²⁾。地デジ化においてテレビ局は多額の設備投資を必要とし、

それらを補填するための国費の投入⁽³⁾や電波オークションの導入⁽⁴⁾が検討されるなど、議論や研究が活発になった。地デジ化後も、その影響などについての研究が活発になされた。二〇〇三年以降を対象とすれば、それら地デジ化前後の研究が含まれることになる。

また、二〇〇〇年代にはインターネットの完全普及、さらにはスマートフォンの登場など、「ユビキタス社会」が到来した。地デジ化の社会的要請自体がインターネットのモバイル利用を前提としたものであったが、それらがテレビに及ぼす影響についての研究も、自ずとレビュー対象に含まれる。

本稿においてはレビュー対象をテレビ研究という一種の「ジャンル」に限定したが、ジャンルについては多くの批判がある⁽⁵⁾。ジャンルによる限定を是としたとしても、現在の複雑なメディア環境においてはテレビだけを対象にすることは難しい⁽⁶⁾。メディア間の相互影響を見つつ、ある程度の時間経過の中で、複層的に見る必要がある。

それでも本稿においては、あえてテレビに限定したい。比較メディア論がそうであるように、ある形式に着目しなければ比較することさえ難しいからだ。テレビに限定することで、同じ放送史としてラジオと比較することが可能となる。

しかし一方で、やはりテレビをテレビの中だけで語ることの難しさも生じている。よって本稿では、前半で「近年の国内におけるテレビ研究」を概観し、後に「近年の(テレビを含む)メディア研究の大きな潮流」を見ていきたい。字数の関係もありレビューの深さは限定される。また多産な研究者については、その著作のすべてを網羅することは不可能であった。

しかしながら結果として、本稿において言及した専門書は一二〇冊を超えた。近年のテレビ研究の全てを総覧したとは言いがたいが、限られた字数の中では妥当な冊数であろう。

二 近年のテレビ研究の成果

以下、近年のテレビ研究を概観していく。領域の明示においては、適宜（ ）中に示す（例…インターネット）〔国際地域研究〕など。

（二）定期刊行系

日本国内における放送主体は、大別するとNHKと民間放送に分けられるが、NHKの放送文化研究所は着実に研究成果をあげ、その成果は定期刊行物として出版されている（不定期もある）。主なものに月刊の『放送研究と調査』、年刊の『NHK放送文化研究所年報』『NHK年鑑』がある。

より学術研究に近いものとしては、NHK放送文化研究所編『放送メディア研究』（丸善プラネット）がある。『放送学研究』を前身とする『放送メディア研究』は、二〇〇三年に創刊されて以来、ほぼ毎年刊行されている。『放送メディア研究』のテーマは時局を捉えており、一種のメルクマールともいえる。第一号（二〇

〇三年）から第二二号（二〇一五年）までのテーマをみてみよう。

- 「メディア変容の時代と放送」
- 「デジタル時代の公共空間」
- 「情報空間の多様化と生活文化」
- 「デジタル社会と「テレビ」の位置」
- 「社会における「公共性」のゆらぎと「放送」の課題」
- 「グローバル化と放送メディア」
- 「都市、地域、メディアの関連を再考する」
- 「始動するアーカイブ研究」テレビ・ドキュメンタリーは何を描いてきたか」
- 「メディア融合時代のジャーナリズムの新しい可能性」
- 「放送・通信融合の進展と放送制度の行方」
- 「進化する災害報道」東日本大震災から3年・メディア多様化時代の防災情報」
- 「多様化する子どもの学習環境と教育メディア」

これから、大きなキーワードは「グローバル」と「インターネット」であり、そのなかでいかに「公共」放送として「報道(ジャーナリズム)」あるいは「記録(ドキュメンタリー・アーカイブ)」していくかを問うていることがわかる。

(二) ジャーナリズム

以下、個別の領域ごとに見ていく。まずは『放送メディア研究』のキーワードのひとつであった「ジャーナリズム」関連から概観する。

津金澤聡廣・武市英雄・渡辺武達責任編集『メディア研究とジャーナリズム21世紀の課題』(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)には重要な論考が含まれている。

第6章・デニス・マクウィール「オーディエンス研究の理論と実際」は、テレビ研究などで不用意に用いられがちな「オーディエンス」概念とその理論を研究史的にまとめている。第12章・藤田真文「テレビとこれからの社会」は、テレビ視聴における「空間」「時間」

「社会的中心性」について論じている。井上宏・荒木功責任編集『放送と通信のジャーナリズム』(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)も、「包括的視点」から現代ジャーナリズムの問題点について論考している。

大石裕『ジャーナリズムとメディア言説』(勁草書房、二〇〇五年)は、ニュース分析の手法と理論について詳述している。大石は、『ジャーナリズムと権力』(世界思想社、二〇〇六年)、『戦後日本のメディアと市民意識―大きな物語の変容』(ミネルヴァ書房、二〇一二年)においても重要な視点を提示している。大石の提示する、「アジェンダ・セッティングとフレーミング」を「記憶(研究)」と融合させる分析手法については、後半で言及する。

この他「ジャーナリズム」関連の研究としては、国内における海外ニュースを収集し計量分析を行った吉田史彦『データが語るメディアの国際報道』(東海大学出版部、二〇一四年)がある。ニュース言説については、伊藤守・岡井崇之編『ニュース空間の社会―不

安と危機をめぐる現代メディア論』世界思想社、二〇一五年）、萩原滋編著『テレビニュースの世界像―外国関連報道が構築するリアリティ』（勁草書房、二〇〇七年）、小玉美意子『テレビニュースの解剖学 映像時代のメディア・リテラシー』（新曜社、二〇〇八年）をあげておく。

『ジャーナリスト教育』の観点からは、花田達朗・廣井脩編『論争 いま、ジャーナリスト教育』（東京大学出版会、二〇〇三年）にいくつかの論考がある。テレビ・ジャーナリズムにおいて「キヤスター」の重要性は増しているが、そのキヤスターの役割・機能に着目した研究としては深澤弘樹『変容するテレビニュースとキヤスターの役割』（春風社、二〇一五年）がある。

ジャーナリズムは政治学と重なりあう部分が多いが、「政治」の観点からは、山腰修三『コミュニケーションの政治社会学―メディア言説・ヘゲモニー・民主主義』（ミネルヴァ書房、二〇一二年）とジェームズ・カラン『メディアと権力 情報学と社会環境の革変を

求めて』（論創社、二〇〇七年）をあげておきたい。

テレビとスポーツ・ジャーナリズムとの関係については、牛木素吉郎・黒田勇編『ワールドカップのメディア学』（大修館書店、二〇〇三年）がある。

（三）ドキュメンタリー・東日本大震災・アーカイブ

〈テレビ・ドキュメンタリー〉研究における通史的なものとしては、崔銀姫『日本のテレビドキュメンタリーの歴史社会学』（明石書店、二〇一五年）があげられる。戦争ドキュメンタリーの総覧としては、桜井均『テレビは戦争をどう描いてきたか』（岩波書店、二〇〇五年）がある。

各論的なドキュメンタリー研究は多い。伊藤守『メディア文化の権力作用』（せりか書房、二〇〇二年）には、丹羽美之「一九六〇年代の実験的ドキュメンタリー―物語らないテレビの衝撃」と阿部潔「スポーツ・ドキュメンタリーのポリテイクス―女子マラソン番組における「感動の物語」と「凄さの衝撃」が収録され

ている。丹羽には、「牛山純一 テレビに見た「夢」」吉見俊哉編『万博と沖縄返還―1970年前後』（岩波書店、二〇一五年）もある。南誠「中国残留日本人」の語られ方―記憶・表象するテレビドキュメンタリー―山本有造編著『満洲―記憶と歴史―』（京都大学学術出版会、二〇〇七年）は、中国残留孤児のテレビ・ドキュメンタリーにおける表象と記憶の関係を明らかにしている。小林直毅編『「水俣」の言説と表象』（藤原書店、二〇〇七年）は、中央と地元メディアの言説・表象の差異などを明らかにしている。

ドキュメンタリー関連については、近年（アーカイブ）と連関しての研究・論考が多い。その領域においてはNHKのプロジェクト「NHK番組アーカイブス 学術利用トライアル」の存在が大きい⁷⁰。当該のプロジェクトからは、テレビ・ドキュメンタリーに関する多くの学術研究が生まれているが、その成果は、すでにあげた『放送研究と調査』に掲載されている。アーカイブの活用研究としては、早稲田大学ジャーナリズム

ム教育研究所・放送番組センター編『放送番組で読み解く社会的記憶』（日外アソシエーツ、二〇一二年）もある⁷¹。

報道（ジャーナリズム）・記録（ドキュメンタリー・アーカイブ）の対象には大災害も含まれるが、近年における代表的なものは（東日本大震災（3・11））となるだろう。丹羽美之・藤田真文編『メディアが震えた テレビ・ラジオと東日本大震災』（東京大学出版会、二〇一三年）は、研究者だけでなく多くのテレビ記者などが寄稿している。原由美子・野口武悟・山田健太編『3・11の記録―東日本大震災資料総覧―テレビ特集番組篇』（日外アソシエーツ、二〇一四年）は、論考ではなくテキスト・アーカイブであるが、東日本大震災関連のテレビ特番を網羅的にみることができる。高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也『311情報学 メディアは何をどう伝えたか』（岩波書店、二〇一二年）は、メディア研究を情報学の観点から捉え直し、さらにアーカイブを視野に入れ実践的に論考している。テレビ

による対外発信の観点からは、高島肇久「テレビによる日本の対外情報発信―東日本大震災と日本のテレビ国際放送」有山輝雄・伊藤陽一・桂敬一・向後英紀・明石和康・我孫子和夫・高島肇久『日本からの情報発信―現状と課題―』（新聞通信調査会、二〇一三年）がある。

〈東日本大震災（3・11）〉関連のメディア言説の分析としては、遠藤薫『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか 報道・ネット・ドキュメンタリーを検証する』（東京電機大学出版局、二〇一二年）、名嶋義直・神田靖子編『3・11原発事故後の公共メディアの言説を考える』（ひつじ書房、二〇一五年）をあけておきたい。前者は、テレビとネットメディアとの間メディア性を含めた研究を行っている⁹⁾。すでにあげた『放送メディア研究』第二一号も東日本大震災を特集している。

報道やドキュメンタリーなど、放送された「記録」は少なからず〈アーカイブ〉される。残念ながら日本

における放送アーカイブの取り組みは、他の先進国に比べ遅れている¹⁰⁾。アーカイブの観点からは、丹羽美之・吉見俊哉編『戦後復興から高度成長へ 民主教育・東京オリンピック・原子力発電』（東京大学出版会、二〇一四年）が、一部テレビ関係の論考を含んでいる。アーカイブ先進国・フランスの事例については、エマニュエル・オーグ『世界最大デジタル映像アーカイブINA』（白水社、二〇〇七年）がある。

テレビと広告は切っても切り離せない関係にあるが、〈広告〉と〈アーカイブ〉の観点からは、高野光平・難波功士編『テレビ・コマーシャルの考古学―昭和30年代のメディアと文化』（世界思想社、二〇一〇年）がある。京都精華大学のアーカイブ・プロジェクトをベースにした実践的研究であるが、アーカイブが整備されればこのような知見が得られることを示している。他に、真鍋一史編著『広告の文化論―その知的関心への誘い』（日経広告研究所、二〇〇六年）にも、テレビCMについての論考がある。

(四) 記号論

『記号論』におけるテレビ研究としては、まず二〇〇七年の日本記号学会編『テレビジョン解体』(慶應義塾大学出版会)をあげておきたい。日本における現代記号論は着実な成果をあげ続けているが、ここ十数年のテレビ関連の記号論的研究は、この『テレビジョン解体』から見ていけばいいだろう。『テレビジョン解体』は名の通り、テレビのみを対象に、記号論的アプローチによってテレビを「解体」しようとしている。「テクノロジー」「アーカイブ」「ドキュメンタリー」「ヒロシマ」など、その後の研究の流れを形作っていく論考が多く含まれているが、ここでは「ジャンル」についての二つの論考をあげておく。フランソワ・ジヨスト「ジャンルの約束」と、それを受けた形での西兼志「ジャンルの約束」解題 ジャンルの掟―「契約」の限界から「接触」の可能性へ」である。

ジヨスト自身も言及しているように⁽¹¹⁾、テレビ研究

だけでなく、文学研究においてジャンルは長く議論の対象となっている。ジヨストは自身の仕事を振り返りつつ、ジャンルを契約ではなく約束と捉えることを説いている。契約とは「二者の間で結ばれる」ものであり、約束とは「発話者のみに義務を生じさせる」ものだとした上で、「情報」「フィクション」「ゲーム」による分類を再提示している。西は、ウンベルト・エーコのパレオ／ネオTVの議論を援用し、ジヨストあるいは社会学的テクスト論に批判を加えている。西によれば、ジヨストらは「技術(決定論)を畏れ」ており、それによってテレビの技術的側面を捉えることができないという。『テレビジョン解体』の成果は、その後伊藤守・毛利嘉孝編『アフター・テレビジョン・スタディーズ』(せりか書房、二〇一四年)へと昇華している。

記号論の成果としては他に、エーコにインスパイアされた形で⁽¹²⁾水島久光・西兼志『窓あるいは鏡 ネオTVの日常生活批判』(慶応義塾大学出版会、二〇〇八

年)がある。水島には、『閉じつつ開かれる世界 メディア研究の方法序説』(勁草書房二〇〇四年)もある。

また伊藤守は、『情動の権力―メディアと共振する身体』(せりか書房、二〇一三年)において、ガブリエル・タルドのメディア論的再解釈に挑んでいる⁽¹³⁾。藤田真文・岡井崇之『プロセスが見えるメディア分析入門―コンテンツから日常を問い直す』(世界思想社、二〇〇九年)は、メディア分析の初学者向けテキストであるが、記号論的メディア分析手法を具体的に示している。他に、伊藤守編『テレビニュースの社会学―マルチメディア分析の実践』(世界思想社、二〇〇六年)、藤田真文『ギフト、再配達―テレビ・テキスト分析入門』(せりか書房、二〇〇六年)もある。

記号論は言語学に含まれることが多いが、『言語学』におけるテレビ研究としては、石井正彦・孫栄爽『マルチメディア・コーパス言語学―テレビ放送の計量的表現行動研究』(大阪大学出版会、二〇一三年)と、同・石井の『テレビ放送のマルチメディア・コーパス―映

像・音声を利用した計量的言語使用研究の可能性―

田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦『コーパス日本語学の新展開』(特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班、二〇一〇年)などが、計量的アプローチからのテレビ分析を行っている。四巻シリーズの『メディアとことば』(ひつじ書房)にも、いくつかのテレビ研究(論文)が含まれている。例えば、西尾純二「TVローカル情報番組にみる方言使用の地域差」三宅和子・佐竹秀雄・竹野谷みゆき編『メディアとことば』⁽¹⁴⁾(二〇〇九年)があげられる。

(五) メディア史・歴史社会学

テレビを対象とした「メディア史」研究としては、

佐藤卓己『テレビ的教養 一億総博知化への系譜』(NIT出版、二〇〇八年)がある。佐藤は序章で、教育(教養)の観点からのテレビ研究の欠如を指摘しているが⁽¹⁴⁾、その状況は今もあまり変わっていない。ゆとり教育の見直し以降、テレビと教育の関係への注目が

高まる可能性はあるだろう。

教育の観点からは他に、藤岡秀雄『学びのメディアとしての放送—放送利用個人学習の研究』（学文社、二〇〇五年）がある。また、すでにあげた『放送メディア研究』第二二号のテーマも教育である。

有馬哲夫『こうしてテレビは始まった—占領・冷戦・再軍備のはざままで—』（ミネルヴァ書房、二〇一三年）は、有馬自身のライフワークともいえる日本における民間放送の開始を、新たなインタビューを追加しとめている。巻末の人物紹介や年表などの資料も有益であろう。正力を含むメディア系の人物研究をまとめたものに、土屋礼子編著『近代日本メディア人物誌—創始者・経営者編—』（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）がある。すでに述べたように、テレビをテレビだけで語ることは難しい。その意味においてはテレビ研究者も、他のマス・メディアを広く知る必要があるだろう。本書は学部生をも対象とした人物誌であり、メディア横断的に平易に読める。

他に、古田尚樹『鉄腕アトム』の時代—映像産業の攻防』（世界思想社、二〇〇九年）は、アニメが果たした「映画とテレビの接続」の役割を史的に追っている。

三澤真美恵・佐藤卓己・川島真『電波・電影・電視—現代東アジアの連鎖するメディア』（青弓社、二〇一二年）は、東アジア各国における放送史を明らかにしている。

歴史社会学やメディア史研究において近年興隆している『記憶研究』の領域においては⁽¹⁵⁾、萩原滋編『テレビという記憶—テレビ視聴の社会史』（新曜社、二〇一三年）、萩原滋・国広陽子編『テレビと外国イメージ—メディア・ステレオタイプ研究』（勁草書房、二〇〇四年）、伊藤守「公共の記憶をめぐる対抗とテレビジョン」『記憶・暴力・システム—メディア文化の政治学』（法政大学出版局、二〇〇五年）などがある。

（六）文化研究・ジェンダー論

〈文化研究〉においても史的アプローチは多く用いられるが、テレビ文化研究としては、吉見俊哉・土屋

礼子責任編集『大衆文化とメディア』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）に複数の論文が収められている。第7章の吉見俊哉「テレビを抱きしめる戦後」は、戦後の日本文化をテレビとの関係を通して通時的にみている。第9章の石田佐恵子「家庭空間とワイドショー的世界―ワイドショー・ジャンルの成立と拡散」は、戦後の「核家族化」「サラリーマン化」「（専業）主婦化」などの文化変容のなかで、どのようにワイドショーというジャンルが成立したのかを明らかにしている。クイズ番組については、石田佐恵子・小川博司編『クイズ文化の社会学』（世界思想社、二〇〇三年）がある。

NHK放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』（新曜社、二〇〇八年）にも、いくつかの文化論的論考がある。第6章・香取淳子「高齢者のメディア生活における光と影」は「高齢者にとつてのテレビ」を論じているが、少子高齢化が進む現代日本においては、より重要度が増している論点であろう。第8章・佐藤俊樹「テレビを理解する Understanding

「Television」データからみたメディア空間の現代」は、「テレビの語りにくさ」を克服するために、言説分析と計量分析の併用を強調している。

〈文化研究〉としては他に、名部圭一「テレビ視聴のスタイルはどのように変化したか」南田勝也・辻泉編『文化社会学の視座―のめりこむメディア文化とそこにある日常の文化―』（ミネルヴァ書房、二〇〇八年）をあげておく。

メディア論においては勿論であるが、特に文化研究においては〈オーディエンス〉が重視される。前納弘武編『離島とメディアの研究―小笠原篇』（学文社、二〇〇〇年）は、一九九六年になってようやく地上波が見られるようになった小笠原を対象にフィールドワークを行っている。前納によれば、小笠原村は本土と比べ特異なメディア環境にあるという。地上波が見られないことからビデオ（カセット）で動画コンテンツに接していたり、また定期便が月に一、二本しかなく、数週間遅れの新聞をまとめて読んでいたという。本土

は勿論、他の情報過疎地との比較研究は興味深い。前納弘武・内田康人・岩佐淳一編著『変わりゆくコミュニケーション 薄れゆくコミュニケーション 報道の現在』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）は、島しょ社会としての沖縄県大東島の事例研究を含んでいる。

「子ども」についてのオーディエンス研究は、深谷昌志『昭和の子ども生活史』（黎明書房、二〇〇七年）と、北田暁大・大多和直樹編著『子どもとニューメディア』（日本図書センター、二〇〇七年）をあげておきたい。前者の6章「テレビとともに育つ」は、子どもの生活におけるテレビを、学業成績や自己認識との関連のなかで通史的に概観できる。

オーディエンスの〈社会関係資本〉に着目した研究としては、『孤独なボウリング―米国コミュニケーションの崩壊と再生』（柏書房、二〇〇六年）がある。オーディエンス研究の研究史を把握するには、〈ジャーナリズム〉の項で述べたマクウィールの論考が有用だろう。村〈ジェンダー〉の観点からのテレビ研究も多い。村

瀬敬子「きょうの料理」にみる「伝統」の創造 テレビとジェンダーの社会学 高井昌史・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する―歴史・ジェンダー・ナショナルリティー』（世界思想社、二〇〇九年）は、テレビの料理番組が「おふくろの味」などの「伝統」の創造に関わった過程を明らかにしている。

ジェンダーの観点からのテレビ研究としては他に、国広陽子・東京女子大学女性学研究所編『メディアとジェンダー』（勁草書房、二〇一二年）、天野正子ほか編『表現とメディア』（岩波書店、二〇〇九年）、中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』（世界思想社、二〇一〇年）などがある。ジェンダーの観点からの「韓流」研究としては、城西大学ジェンダー・女性学研究所編『ジェンダーで読む〈韓流〉文化の現在』（現代書館、二〇〇六年）がある。

（七）国際地域研究・国内地域研究

グローバル化が進み、またそれと平行して学際的な

研究が求められている現状においては、『国際地域研究』の重要度は増している。従来テレビに關しての国際地域研究は、アメリカあるいはヨーロッパを対象としたものが多かったが、石田英敬・西谷修・中山智香子・港千尋『アルジャジーラとメディアの壁』(岩波書店、二〇〇六年)など、昨今は中東エリアを対象としたものが増えている。最新研究としては、千葉悠志『現代アラブ・メディア 越境するラジオから衛星テレビへ』(ナカニシヤ出版、二〇一四年)がある。

一方で、東アジアを対象とした研究も増加している。李相哲編『日中韓の戦後メディア史』(藤原書店、二〇一二年)は、現代の中国メディアと政府との關係を明らかにしている。岩渕功一『対話としてのテレビ文化―日・韓・中を架橋する』(ミネルヴァ書房、二〇一一年)もある。谷川建司・須藤瑤子・秋菊姫・王向華『コンテンツ化する東アジア 大衆文化／メディア／アイデンティティ』(青弓社、二〇一二年)は、一部テレビアニメについての論考が収められている。東アジア各

国のテレビ史(放送史)としては、すでにあげた『電波・電影・電視 現代東アジアの連鎖するメディア』がある。

文化的越境について注目が集まったきっかけのひとつは韓流ブームであった。『韓流(テレビドラマ)』についての研究を列挙すると、石田恵子・木村幹・山中千恵編『ポスト韓流のメディア社会』(ミネルヴァ書房、二〇〇七年)、張和卿『韓国のテレビドラマにおける「結婚物語」の分析』山中美由紀編『変貌するアジアの家族―比較・文化・ジェンダー―』(昭和堂、二〇〇四年)、吳咏梅『日劇のように優雅に、韓劇のように温かく 中国における日本と韓国テレビドラマの受容』谷川建司・王向華・吳咏梅編著『越境するポピュラーカルチャー リコウランからタッキーまで』(青弓社、二〇〇九年)がある。

日本のドラマの東アジアへの「越境」については、大場吾郎『韓国で日本のテレビ番組はどう見られているのか』(人文書院、二〇一二年)、吳咏梅『プチュル

気分と日本のテレビドラマ『王敏編』意の文化と情の文化―中国における日本研究』（中央公論社、二〇〇四年）などがある。

その他、東アジアを中心とした国際地域研究として、夏扎提古麗沙吾提『マスコミ理論とライフスタイル 新疆ウイグル自治区における調査研究』（学文社、二〇一四年）、林怡煖『台湾のエスニシティとメディア―統合の受容と拒絶のポリティクス』（立教大学出版会、二〇一四年）、菅谷実編著『地域メディア力 日本とアジアのデジタル・ネットワーク形成』（中央経済社、二〇一四年）をあげておく。菅谷は、日本あるいは東アジアの「地域からの発信」状況を明らかにしているが、第5章「地方からの海外番組発信・販売」における北海道テレビ（H T B）の事例が興味深い。

多くの放送局の範となっているBBCについては、原麻里子・柴山哲也編著『公共放送BBCの研究』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）がある。

一方、国内に目を向けると、黒田勇編『送り手のメ

ディアリテラシー―地域からみた放送の現在』（世界思想社、二〇〇五年）、地域社会と情報環境研究班『日本の地域社会とメディア』（関西大学経済・政治研究所、二〇一二年）がある。

地域との関係においてはケーブルテレビの観点も欠かすことができない。〈ケーブルテレビ・CATV〉については、林茂樹・浅岡隆裕編『ネットワーク化・地域情報化とローカルメディア ケーブルテレビの今後を見る』（ハーベスト社、二〇〇九年）、同・林茂樹編『地域メディアの新展開―CATVを中心として―』（中央大学出版局、二〇〇六年）、川島安博『日本のケーブルテレビに求められる「地域メディア」機能の再検討』（学文社、二〇〇八年）がある。

地域との関係とは「公共（性）」を含意していることが多いが、それについては松野良一『市民メディア論 デジタル時代のパラダイムシフト』（ナカニシヤ出版、二〇〇五年）と津田正夫『新版 パブリック・アクセスを学ぶ人のために』（世界思想社、二〇〇六年）をあ

げておく。

〈公共（圏）〉については、藤田真文「マス・メディアと公共圏をめぐる問題群」 船橋晴俊・壽福眞美編著『公共圏と熟議民主主義 現代社会の問題解決』（法政大学出版会、二〇一三年）、水島久光『テレビジョン・クライシス―視聴率・デジタル化・公共圏』（せりか書房、二〇〇八年）などがある。すでにあげた『放送メディア研究』第五号も、公共性を主なテーマに掲げている。

（八）インターネット・経済

〈インターネット〉の存在抜きに現在のメディア環境を語ることは難しく、またグローバル化の進行を加速させている中心的メディアもインターネットである。そのインターネットは、我々ユーザーだけでなくテレビの送り手にも多大な影響を与えている。

日本民間放送連盟は、インターネット時代のテレビの在り方について多くの研究を行っている。報告書を

含め、以下列挙すると、『放送の将来像と法制度研究会』報告書（二〇一〇年）、『ネット・モバイル時代の放送』（学文社、二〇一二年）、『スマート化する放送 I C Tの革新と放送の変容』（三省堂、二〇一四年）、『アジア太平洋地域のテレビ局とインターネット 第22回 J A M C O オンライン国際シンポジウム』（放送番組国際センター、二〇一五年）などがある。

インターネットとテレビの「間メディア性」の観点からは、遠藤薫『間メディア社会の（ジャーナリズム）』（東京電機大学出版局、二〇一四年）などがある。

商業放送だけでなく、公共放送においても〈経済〉的側面は避けて通れない。経済的側面からのテレビ研究としては、春日教測・穴倉学・鳥居昭夫『ネットワーク・メディアの経済学』（慶應義塾大学出版会、二〇一四年）がある。春日らは、複雑な放送市場において「市場の失敗」がいかに生じ、またどのようにすれば最適化が可能かを検討している。公共放送と民間放送の競合については、特に興味深い。

大場吾郎『グローバル・テレビネットワークとアジア市場』(文真堂、二〇〇八年)は、多くの海外文献をひきつつ、MTVなどのアメリカの事例をメディア産業論の観点から分析している。また大場は、『アメリカ巨大メディアの戦略―グローバル競争時代のコンテンツ・ビジネス』(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)でリソース・ベース理論⁽⁶⁾を分析枠組みに用い、メディア企業・コンテンツ企業を「資源」の観点から分析している。

コンテンツ産業における〈社会関係資本〉に着目した研究としては、樺島榮一郎編著『メディア・コンテンツ産業のコミュニケーション研究―同業者間の情報共有のために―』(ミネルヴァ書房、二〇一五年)がある。

テレビと〈広告〉の関係についての研究をいくつかあげておくと、山下玲子・藤井達也『ホストセリングを知っていますか?日本の子ども向けテレビCMの実態』(春風社、二〇一五年)は、番組の登場人物などが

商品を紹介するホストセリングという比較的新しいCM手法の実態を調査している⁽⁷⁾。他には、山田奨治編『文化としてのテレビ・コマーシャル』(世界思想社、二〇〇七年)がある。

(九) その他の領域

ここまで、いくつかの領域を見てきたが、それら以外にもテレビ研究は多い。

〈制作論・コンテンツ論〉では、金井明人・丹羽美之編著『映像編集の理論と実践』(法政大学出版局、二〇〇八年)、長谷正人・太田省一編著『テレビだよ!全員集合―自作自演の1970年代』(青弓社、二〇〇七年)がある。前者は、ニュース報道などにおける「編集」に特化して理論化を試みている。

テレビを中心的な対象とした〈理論〉研究は近年少ないが、かつて一九六〇年代前後に「旋風」を巻き起こしたのはマーシャル・マクルーハンであった。そのマクルーハンのメディア論的再考に、門林岳史『ホワ

ツチャドウィーン、マーシャル・マクルーハン?―感性論的メディア論』(N T T出版 二〇〇九年)がある。門林は、難解なマクルーハンの筆致・文体について、ベンヤミン的読解の必要性を説いている。

〈心理学系〉では、坂元章『メディアと人間の発達―テレビ、テレビゲーム、インターネット、そしてロボットの心理的影響―』(学文社、二〇〇三年)が、国内外の研究成果を広く渉猟している。坂元には、『メディアとパーソナリティ』(ナカニシヤ出版、二〇一一年)もある。

ステイブン・ジョンソン『ダメなものは、タメになる テレビやゲームは頭を良くしている』(翔泳社、二〇〇六年)は、テレビなどのメディアの影響を是とする立場であるが、マンフレド・シュピッツァー『デジタル・デメンチア 子どもの思考力を奪うデジタル認知障害』(講談社、二〇一四年)は、第六章「ベビー・テレビとベビー・アインシュタインDVD」などにおいて多くの研究成果を引用しつつ、メディアの影響を

是とする立場を強く批判している。

〈コミュニケーション論〉では、橋元良明編『メディア・コミュニケーション学』(大修館書店、二〇〇八年)をあげておく。橋元には、『メディアと日本人―変わりゆく日常』(岩波書店、二〇一二年)もある。

〈メディア・リテラシー〉関連では、富山英彦『メディア・リテラシーの社会史』(青弓社、二〇〇五年)が、メディア・リテラシーの研究史を批判的に論じている。人類学系からのアプローチとしては、飯田卓・原知章編『電子メディアを飼いならす 異文化を橋渡すフィールド研究の視座』(せりか書房、二〇〇五年)がある。

〈表現の自由〉の観点からは、田島泰彦編著『表現の自由とメディア』(日本評論社、二〇一三年)に一部テレビ関連の論考が含まれている。

実務家を中心とした〈提言〉としては、辻一郎・音好宏監修『テレビの未来と可能性―関西からの発言―』(大阪公立大学共同出版会、二〇一三年)や放送倫理・

番組向上機構(BPO)・放送と青少年に関する委員会『青少年委員会公開シンポジウム「新時代テレビ」いま、制作者たちへ』(二〇二二年)がある。早稲田大学出身のジャーナリスト・メディア関係者は多いが、早稲田大学メディア文化研究所編『メディアの地域貢献「公共性」実現に向けて』(二藝社、二〇一〇年)も提言的な論考を含んでいる。

ここまで見てきた多くの領域を広く概観するとすれば、渡辺武達・田口哲也・吉澤健吉編『メディア学の現在』(世界思想社)の「新訂第2版」が二〇一五年に出ている。

三 横断的・学際的・全体的な統合の動き

ここまでテレビ研究を概観してきたが、以下においては水準を上げ、テレビ研究を含んだ「メディア研究」の潮流を見ていきたい。

新たな潮流の研究者の多くは、現在メディア研究が

大きなアポリアに陥っているという認識を共有している⁽¹⁸⁾。メディア環境はグローバルな規模の変容のなかにあり、その変容を「記述」することさえ困難な状況にある。

打開策の大きな流れは、哲学・システム論・社会情報学の三つである。勿論これら以外にも、メディア史・記号論・文化論・歴史社会学などが着実に成果をあげている。しかし前述の三つは、それらの領域をも含んだ一種の「グランドセオリー」として「メディア環境」を捉えようとしている。すでに述べた「ジャンルの壁」を打破し、現代特有の再帰的・自己言及的なメディア社会を、哲学にまで遡り、あるいはシステムとして、また情報学や通信工学的アプローチをもって把握・解明しようとしている。

しかしそれらは分断されているわけではなく、重複している部分も多い。哲学的にアプローチしつつもシステム論的であったり、システム論であっても哲学や社会情報学のエッセンスを取り入れるなど、共通する

部分も少なくない。研究者の専門領域からも、それらの潮流が学際的に進行していることがわかる。以下、三つの潮流について簡単に見ていく。

(一) 哲学的アプローチ

メディア環境の複雑化と平行して、アカデミックにおける領域の細分化も同時進行している。そのようななか石田英敬らは、哲学による架橋を試みている。石田は記号学を専門としているが、近年、哲学へと自らのスタンスの水準をあげており、学際的なアプローチも多い。その集大成のひとつが、二〇一五年に出版された『デジタル・スタディーズ』シリーズの三冊、石田英敬・吉見俊哉・M. フェザーストーン編『メディア哲学』『メディア表象』『メディア都市』（ともに東京大学出版会）である。

東大・駒場キャンパスを中心とした哲学系・記号論系の研究者と本郷・情報学環の社会学系の研究者、さらには海外の研究者と共同し、厚い論考を行っている。

上位の水準へと移行していることから「テレビ」への言及は少ないが、今後テレビ研究者もこれらの水準の研究・論考を避けて通ることはできないだろう。今後のテレビ研究者に求められるのは、各論としてのテレビ研究と、総論としてのメディア論的視座であり、その統合・止揚は必須であるようにも思われる。

(二) システム論的アプローチ

もうひとつの流れに、〈システム論〉がある。

「公共性」は、テレビなどの放送において重要な概念・要素のひとつであるが⁽¹⁹⁾、高橋顕也「機能分化社会と公共圏―メディア論の視点から」田中紀行・吉田純編『モダニティの変容と公共圏』（京都大学学術出版会、二〇一四年）は、公共性の観点からニクラス・ルーマンのメディア論とユルゲン・ハーバ马斯のそれとの比較を行い、ルーマン理論の有効性を示している。三上剛史は『社会学的ディアボリズム―リスク社会の個人―』（学文社、二〇一三年）において、ギデنزの

親密圏の議論をひきつつルーマンの社会システム論の有効性を説く。そこでキーワードとなるのは『ディアボリズム』である⁽²⁰⁾。ルーマンはメディアのディアボリックな（人々を分離する）機能に着目し、人々は分離されつつ、分離されようとするからこそ結合するという一種のアンビバレンスを見る。

これらルーマンの理論を、メディア論に近い立場で論じているのが大黒岳彦である。『メディアの哲学―ルーマン社会システム論の射程と限界』（NTT出版、二〇〇六年）、『情報社会』とは何か―〈メディア〉論への前哨』（NTT出版、二〇一〇年）などにおいて大黒は、ルーマンの社会システム論の精緻化をメディア論的に図っている。ルーマンの理論は現実への適用は困難であるともいわれているが、大黒はその「困難」に意欲的に挑んでいる⁽²¹⁾。

（三）社会情報系のアプローチ

西垣通らは、人文・社会科学系と情報工学・通信工

学系の架橋を目指し、「基礎情報学」などを構想している。テキスト的ではあるが、伊藤守・西垣通・正村俊之編『パラダイムとしての社会情報学』（早稲田大学出版会、二〇〇三年）、西垣通『ネットとリアルのあいだ生きるための情報学』（筑摩書房、二〇〇九年）、西垣通・河島茂生・西川アサキ・大井奈美編『基礎情報学のヴァイアビリティ ネオ・サイバネティクスによる開放系と閉鎖系の架橋』（東京大学出版会、二〇一四年）がある。ヴァレラ・マトウラーナやルーマンの議論を継承しつつ、階層的自律コミュニケーションシステム（HACS）として理論の精緻化を試みている⁽²²⁾。

西垣に対する批判に、斎藤環『メディアは存在しない』（NTT出版、二〇〇七年）がある。同書には、西垣の応答も収録されている。

四 これまでの研究成果の統合

以上、現在の新潮流を三つみてきた。これらは非常

に意欲的な取り組みであり、今後が注目されることはいうまでもない。しかしその試みが壮大・大局的であればあるほど、困難さは増すことになるだろう。大局的な構想を視野に入れつつも、着実に成果をあげていくことも――前述の研究者たちは行っているが――大切だろう。

最後に、着実な取り組みを二つあげておきたい。ひとつは記号論からのアプローチ、もうひとつがメディア史・歴史社会学などにおける「記憶研究」である。

(一) 記号論の可能性

すでに前半でレビューしたが、伊藤・藤田らの取り組みは着実に成果をあげている。それらの成果は、『テレビジョン解体』『アフター・テレビジョン・スターズ』などに収められている。

構築主義を持ち出すまでもなく、メディアのなかでやりとりされているのはテキストに他ならない。間メディア性が高まろうとも、その間メディア的相互作用

の「メディア」のほとんどは、やはりテキストである。テキスト形態には様々あるが、それらは究極的には「文字」「映像」「音声」に集約できる。記号論の有効性は、メディア環境がいかに複雑化・多様化しようとも一定度存在するだろうし、むしろ複雑化・多様化すればするほど、記号論の適用範囲の広さが際立つともいえるだろう。

(二) 記憶研究の可能性

もうひとつのアプローチは、メディア史・歴史社会学・文化社会学などにおいて近年盛んな「記憶研究」である。記憶研究単独でも多くの成果を残しているが、筆者が可能性を感じるのは、その記憶研究とメディア論との融合である。その「融合」はすでに始まっているが、さらに狭義の意味においての記憶研究とメディア論との融合は可能なのではないだろうか。具体的いえば、大石裕が示す、アジェンダ・セッティングやフレーミングと「記憶研究」との理論的統合である⁽²⁾。

それぞれの研究者が構築主義的な立場をどの程度取るかによって異なるが、記憶研究においては類型化を行うことは少なく、価値中立的な記述・叙述に徹する。

筆者はその仕事の価値を認めるが、一方で、その厚い事例研究・記述をどう活かしていくのかを検討する必要もあるだろう。理論化とまではいかないまでも、メタ的な類型化や分析は必要なのではないだろうか。

ラディカルな構築主義において量的分析は完全に否定されるが、知識社会学等においては積極的に導入される⁽²⁴⁾。後者の立場をとるならば、アジェンダ・フレームング・時間という三つの変数を導入し、質的だけでなく、「量的」かつ「動的」な記憶の形成過程の分析が可能となるかもしれない。

以上、近年のテレビ研究がある程度の広さと深さをもつて見てきた。端的にいえば、前半でとりあげた研究は「各論的」であり、後半のそれらは「総論的」「包括的」だともいえるだろう。

では、本稿でとりあげた研究に続く者は、各論的研究を行うべきなのか、それとも総論的研究を行うべきなのか。それを厳しく迫れば、二項対立の罠に囚われているということになるが、それでもおそらく大多数の研究者は、まずは各論に注力すべきだろう。総論的な広い視点をもちつつ目の前にある各論的な狭い領域で深さを追求し、相応の実績・経験を積んだ後に総論的な研究にたどり着くのが通常のパスであるように思う。ある対談における西垣の言は、一種の真理をついている。「学生には、学際といっても下手にいろいろ手を出すな、むしろまずきちつと一つのディシプリンを身につけなければ駄目だと、いつも言っているのです」⁽²⁵⁾。

佐藤は、テレビのメディア史研究の難しさの要因として「今なおテレビが日常生活の機軸メディアであるからに他ならない。」⁽²⁶⁾としている。歴史学研究者は、すべてが終わってから史的にアプローチすることが多く、同時代史は忌避される傾向がある。しかし、テレ

ビは同時代だからこそ面白いのではないか。今も「生きていく」からこそ、我々が生きている「現在」に、前向きな意味でリフレクシブに関与できるのではないだろうか。

インターネットやソーシャルメディアの登場以降、テレビ研究は低調なようでもあるが、否、まだ必要とされている研究領域であらう。

- (1) 一九五三年二月一日、NHK東京テレビジョンが本放送を開始した『松田浩』『ドキュメント戦後放送史Ⅰ—知らぬその軌跡—』勁草書房 一九八〇年、二七六頁。
- (2) 二〇〇一年六月の電波法改正により、二〇〇一年七月—四日以降アナログ放送の使用が不可となった(特集「テレビ放送の完全デジタル化」NHK放送文化研究所編『NHK年鑑2012』日本放送出版協会、二〇一二年、八頁)。
- (3) 国土交通課「清水直樹「地上デジタル放送の現状と課題」【第2版】『調査と情報』第六九三号、二〇一〇年、一頁。
- (4) 村上聖「『携帯端末向けマルチメディア放送の行方—地デジ移行後の電波有効利用に向けて—』『放送研究と調査』二〇一〇年一〇月、九九頁。
- (5) フランソワ・ジョスト『ジャンルの約束』日本放送大学編『テレビジョン解体』慶応義塾大学出版会、二〇〇七年、一二—一四頁。

(6) 例えば、水島久光「閉じつつ開かれる世界—メディア研究の方法序説」勁草書房、二〇〇四年、二二—二五頁。

(7) アーカイブを利用した研究成果は、『放送研究と調査』などに随時掲載されている。初期のプロジェクト概要については、阿部康彦「NHKアーカイブス—学術利用トライアル研究—の試み」『放送メディア研究』第八号(丸善フナネット、二〇一一年)。

(8) 付属のDVDには、アーカイブを利用した大学における講義が収録されている。

(9) 遠藤には他に、『間メディア社会における「世論」と「選挙」—日米政権交代に見るメディア・ポリティクス』(東京電機大学出版局、二〇一一年)などがある。

(10) 長井暁「世界の映像アーカイブの現状と課題」『放送研究と調査』二〇〇八年三月。

(11) ジョスト、前掲、二二—一四頁。

(12) エーコが『バレットTV／ネオTV』という概念を提示した論文、矢われた透明性は、同書『窓あるいは鏡—ネオTVの日常生活批判』に日本語が収録されている。

(13) タルドの著書『世論と群衆』(未來社、一九八九年)をライブニッツのモノド論を援用しつつ論考している。

(14) 佐藤早己『テレビ的教養—億総博知化への系譜—』NTT出版、二〇〇八年、一三頁。

(15) 例えば、ビエール・ノラ『記憶の場—フランス国民意識の文化社会史(全三巻)』(岩波書店、二〇〇二年)やジョン・ダワー『敗北を抱きしめて—第二次大戦後の日本人—』(岩波書店、二〇〇一年)がある。

(16) 海外文献をもとにした大場のまとめを参照されたい。『アメリカ巨大メディアの戦略—グローバル競争時代のコンテンツ・ビジネス—』ミネルヴ

ア書房、二〇〇九年、五八頁。

(17) 山下らによると、ホストセリングと類似の概念に「ホストソールド」があり、アメリカでは前者が、イギリスでは後者が規制の対象となっているという。

(18) たとえば、大黒岳彦『ヘゲディアの哲学—ルーマン社会システム論の射程と限界』（NTT出版、二〇〇六年）の「緒論」（九—一八頁）がある。

(19) 日本民間放送連盟放送研究所編『放送の公共性』（岩崎放送出版社、一九六六年）に、重要な論考が多い。

(20) 『社会の経済』（文眞堂、一九九一年）のなかでルーマンは「ディアボリックなもの」という表現を用いたが、三上によれば、ディアボリズムという言葉は社会学用語として使ったのはこれが「初めてではないか」という。

(21) 大黒、前掲、四二—四三頁で、大黒は次のように結論づけている。「公共性・意識・生活世界という二つの問題系は、マスメディア論がルーマン社会学理論の頂点であり、完成点であることを示すと同時に、その飽和点であることを示している。（中略）もちろん新たな理論への脱皮・蟬脱の遂行はわれわれに課された任務である。」

(22) 概要をつかむには、ドミニク・チェン『基礎情報学の情報システムデザインへの応用に向けた試論』（西垣通・河島茂生・西川アサキ・大井奈美編『基礎情報学のヴァイアビリティ—ネオ・サイバネティクスによる開放系と閉鎖系の架橋』（東京大学出版会、二〇一四年））がある。

(23) 大石裕『ジャーナリズムとメディア言説』（勁草書房、二〇〇五年）の第四章「アジェンダ設定と『社会的現実』の構築」。

(24) 佐藤俊樹『國のありか—言説分析と『実証性』—』（佐藤俊樹・友枝俊雄編『言説分析の可能性—社会学的方法の迷宮から』東信堂、二〇〇六年、七—一八頁）。

(25) 吉見俊哉・花田達朗編『社会情報学ハンドブック』（東京大学出版会、二〇〇九年、二六四頁）。

(26) 佐藤卓己『テレビ的教養—一億総博知化への系譜』（NTT出版、二〇〇八年、二三頁）。